

高校生の日常生活における多忙感と退屈感についての調査

○橋本 和秀(余暇問題研究所) 山崎 律子(余暇問題研究所)

キーワード： 多忙感、退屈感、高校生の自由時間、青少年非行

1. はじめに

わが国における青少年問題は、最近になってますます重要な課題となっている。文部省においては、中央教育審議会が「新しい時代を拓く心を育てるために」と題する中間報告(1998年4月)を公表し、遊びの重要性や自然体験活動の振興、ボランティア・スポーツ・文化活動など、レクリエーション関連項目を提言している。また総務庁においても、青少年問題審議会が「問題行動への対策を中心とした青少年の育成方策について」と題する中間報告(1998年6月23日)を公表し、一般的風潮として青少年生活におけるゆとりの喪失も挙げている。その施策への視点として、青少年が「開かれた」関係の中で社会性を培っていくための環境づくり・条件整備が必要であるといっている。しかしながら、具体的な施策はまだ出していない。

このように青少年問題とくに非行問題についても、数多くの施策が展開されているのは事実であるが、それらの多くは社会規制による対策であり、かつ各分野の連携なくして実施されているのが現状である。しかしながら、青少年の非行問題は、単に結果からの対策と取締りの強化という方向に向かうばかりではなく、総合的な予防的視点からの施策を打ち出すことが必要である。その施策の一つとして、彼らの置かれている社会環境および心的背景・状況の把握はもちろん、彼らの余暇環境や余暇行動の側面からのアプローチがより重要と考えられる。すなわち実際的には、年齢的に比較的早い時期からの余暇教育の充実とレクリエーション経験の場と機会の提供ということである。

アメリカ合衆国においては、すでに数多くの研究も行われ、多くの公共レクリエーション部局が他の部局や民間団体と協力して実践的成果を上げている。実際面では、いわゆる非行状態にある青少年への介在よりも、潜在的な非行青少年に対する予防に重点をおいているという報告もある。(Peter A. Witt 他 1996)

本研究は、問題行動を予防するためには、青少年に対して「余暇教育の充実」と「レクリエーション経験の必要性」を、従来にも増して強調されなければならないという問題意識のもとに始められた。

また本研究は、昨年本学会大会の発表(レジャー・レクリエーション研究第37号の第27回大会発表論文集 56-59ページ)の継続研究として、その基礎的資料としての多忙感・退屈感の把握を試みたものである。

2. 研究の目的

今回の研究は、高校生の多忙感・退屈感の実情を把握するため、質問紙による量的把握と並行して、自由記述方式を採用し、その質的分析を主眼とした。具体的な目的としては、次の3項目の把握・検討をすることである。

- ① 一般的な多忙感・退屈感・達成感についての感じ方の把握
- ② 学校における多忙感・退屈感とその充実度の把握と理由の検討
- ③ 学校外(自由時間)における多忙感・退屈感とその充実度の把握と理由の検討

3. 研究の方法

調査対象： 私立S高等学校生徒 男女合計 340名

	1年	2年	3年	計
男子	61	95	67	223
女子	33	43	41	117

有効回答数・・・325 有効回答率・・・95.6%

調査期日： 1998年7月第1週

調査方法： 質問紙法によるクラスごとの集合回答法

調査項目： 上記目的にみられる項目

分析方法： ①については、5項目を設定し2者選一方式とし、比較検討した。

②および③は、単純クロス集計し、その傾向を考察した。

理由の検討は、自由記述回答を②および③の結果との関連で考察した。

4. 結果

1) 日常生活における多忙感・退屈感と達成感

本項目は、高校生がふだんの日常生活において、どの程度の多忙感や退屈感を抱き、またどの程度したいことができているかということと、どの程度友人関係に時間を割かれていると感じるかを、ごく一般的な参考イメージ把握のために行った。(表1参照)

表1 一般的な多忙感・達成感など

	男子		女子	
	YES	NO	YES	NO
時間が足りないと感じる	75.7	24.3	87.8	12.2
何となく忙しく感じる	84.6	15.4	74.8	25.2
暇があって退屈を感じる	19.0	81.0	11.2	88.8
したいことができる	40.5	59.5	37.7	62.3
付き合いに時間が割かれる	31.5	68.5	15.7	84.3

以上の結果を、主に男女生徒を比較しながら考察した。「最近することが多くて時間が足りない」と思っている生徒は、男女とも75%~88%と圧倒的に多い。男子より女子の方が、僅かながら「時間不足」を多く訴えている。「最近何となく忙しい」と感じている生徒も、前項目と同様に74%~85%の範囲で多く、男子生徒の方が女子生徒を少し上回る。また、前記2項目と反対に「暇をもてあまし、退屈することが多い」と感じている生徒は、男女とも11%~19%と、非常に低くなった。

次に「比較的自分のしたいことができる」と思っている生徒は、男女ともほとんど同率であり、約40%というところである。過半数は「自分のしたいことができない」と感じているのである。その原因の一つと考えられる「友人との付き合いに時間がとられることが多い」と感じているのは、男子で約32%、女子で約16%で、極めて少ないことが分かった。

2) 学校における多忙感・退屈感とその充実度

多忙感・退屈感およびその充実度をみるために、回答者に対して「昨日」について、多忙感・退屈感は、「忙しかった」「程々に忙しかった」「退屈だった」のうち、ひとつを選択させた。続いてその充実度をみるため「充実していた」「よかった」「つまらなかつ

た」のうち、ひとつを選ばせせ、その理由を自由記述の回答を求めた。その結果は、次の通りである。なお男女別・学年別に集計したが、ここでは男女別のみを記載する。

表2 学校における多忙感・退屈感および充実度

	男 子				女 子			
	充実	よい		計	充実	よい		計
多忙	(13.3)	(11.9)	(5.0)	30.3	(12.1)	(12.1)	(6.5)	30.8
程々	(4.6)	(22.9)	(11.5)	39.0	(13.1)	(22.4)	(17.8)	53.3
退屈	(1.4)	(5.0)	(24.3)	30.7	(0.9)	(0.9)	(14.1)	15.9
計	19.3	39.9	40.8	100.0	26.2	35.5	38.3	100.0

() 内の％は男女それぞれの全人数比を示す

まず、多忙感と退屈感についてみると、男子生徒は多忙と退屈がほぼ同率となった。女子生徒の場合は、約31%対約16%と、学校での多忙を感じる生徒が多くなった。また、その充実度をみると、「充実していた」と回答した者は、男子生徒において約19%、女子生徒においては約26%という結果となった。反対に「つまらなかった」と回答した者は、男子で約41%、女子で約38%となった。

次に両極端の「多忙であって充実していた」と回答した者と、「退屈でつまらなかった」と回答した者を比較してみると、男子の場合、前者では13%、後者で24%となった。女子の場合では、前者が12%、後者が14%と、ほぼ同数という結果となった。なおそれらの理由については後述する。

3) 学校外における多忙感・退屈感およびその充実度

高校生の学校外の生活は、彼らにとって自由時間とみなすことができる。その前提に立って、学校における質問にならって、その回答を求めた。

表3 学校外における多忙感・退屈感および充実度

	男 子				女 子			
	充実	よい	つまらない	計	充実	よい	つまらない	計
多忙	(20.6)	(16.1)	(9.2)	45.9	(25.2)	(14.0)	(4.7)	43.9
程々	(6.9)	(21.6)	(10.6)	39.0	(12.1)	(24.3)	(10.3)	46.7
退屈	(1.8)	(3.2)	(11.0)	15.1	(0.9)	(2.8)	(5.6)	9.4
計	28.4	40.8	30.8	100.0	38.3	41.1	20.6	100.0

() 内の％は男女それぞれの全人数比を示す

多忙感および退屈感についてみると、男子生徒の場合は、「多忙」とする者46%に対して「退屈」とする者が15%となった。自由時間に多忙感を抱く者が圧倒的に多い。女子生徒の場合も、「多忙」とする者44%に対して「退屈」とする者9%と、男子とはほぼ同様な結果となった。またその充実度は、男子において「充実していた」と感じる者28%に対して、「つまらなかった」とする者30%と、ほぼ同率であった。女子の場合は、前者が38%であり、後者は21%で、男子の傾向とは異なった結果となった。

次に両極端を比較してみると、男子では「多忙・充実」が21%、「退屈・つまらない」と回答した者が11%であった。女子では、前者が25%、後者が6%となった。ここでも男

子とは異なる結果となった。(理由については後述する)

5. 考察

前述の結果と自由記述にみられる理由とを総合的に検討した。

1) 回答にみられる結果を総じて全体をイメージ化すれば、高校生男女とも「時間が足りない」「忙しい」と感じながら、「したいことができない」という達成感も味わえないまま、かつ友人との関係も稀薄な中で生活スタイルをもっているようにみえる。

「時間が足りない」「忙しい」と感じることは、高校生の拘束時間週平均9時間8分であり、学校外での学習時間も週平均2時間半というNHK生活時間調査(1995)の報告と一致点がみられる。

2) 学校生活において、男女の差は多少みられるが、「多忙感」と「退屈感」が、ほぼ半数づつに分かれること、および「充実感」と「つまらなさ感」は、圧倒的に「つまらない」とする者が多い。このことは、この結果から単純に考察するのは困難であるが、授業の在り方や高校生に魅力あるプログラム提供への示唆を与えるものとして注目したい。

3) 学校において「忙しく充実していた」と回答した者は、男女ともそのキーワードは、「授業」「部活」「友人」と表現できる。「忙しくてつまらない」とする者は、「勉強がたいへんだから」「テスト前だから」など積極派と「いつも同じ生活だから」「むかつくから」など消極・不満派に分かれる傾向がある。

4) 学校において「退屈でつまらない」と感じる者は、男女の数的差は認められるが、その理由は「したいことができないから」「同じことの繰り返しだから」「授業が難しいから」「眠いから」「とくに分からない」など、男女差は見当たらない。その理由の内容は、何らかの刺激を求める現代高校生の一面を覗かせている。

5) 一方学校外での行動は、拘束から解放された彼らの自由時間であるから、当然のことながら、圧倒的に充実感を抱く者が多い。その理由は「友人と遊んだから」「したいことができたから」「趣味やバンドの練習」「コンサートに行ったから」など、学校とは異なった解放感を漂わせている。しかし、こうしたことにも多忙感を抱いていることに対しては疑問が残る。すなわち「余暇活動を行っている時も、多忙感を抱いてよいものなのか」という疑問である。

6) 学校においても自由時間においても「退屈でつまらない」と回答した者を抽出してみると、各学年において2～3人みられた。「サメているから」「何もすることがない」「ダラッとした生活だから」など万年無気力のような回答が多かった。何らかの契機が必要とする層といえよう。

6. まとめと課題

本研究において当初設定した目的については、現代の高校生についての多忙感や退屈感の実情とそこにみられた若干の特徴を明らかにすることができた。しかしその理由についての根底に潜む「何ものか」については、把握が困難であった。また本研究は、ごく現実的な場面における高校生の主観を尊重する意味で「昨日」という記憶に頼る質問を試みたが、その信頼性については疑問が残るところである。

今後は本研究を土台として、高校生が将来の生きがいにつながり、かつそれが彼らの問題行動を未然に防ぐための有効な手段ともなり得る「レクリエーション経験」の重要性を、より精密に究明したい。